



吹き飛ば体がロッドを振り上げると同時に、ゴルベータの足下に強烈な地場が現れる。確実にその巨体を捉え、足を止めた。

「見事な魔法だ。」

シャントットの操る魔法は、自分の様に他の属性と合成されたものではない。アルティミシアの様に独自の理（理由）を持つ物でもなければ、ケフカのように捻くれた変形をさせたものでもない。純粹に基本通りの魔法を、極めて高いレベルまで精練したものだ。

アレンジさせることがアイデンティティになっているような自分たちのレベルにおいて、基本魔法をこまごまの破壊力に昇華させたことは純粹に驚嘆する。ここまでいけるものなのだと見せつけられ、一魔導士としてはある種の喜びすら感じる。

「こんな状況でもなければ、闇魔法抜きでやりあつてみたいものだな。」

重力場に手を入れ、己の術で中から相殺する。弾け、開放されると同時に頭上から炎の固まりが降りそそいだ。

「ホーッホッホッホ！他愛無いものですわね!!」

爆炎に包まれる魔人を見て淑女は高笑いをする。

「やあつてそこから光球が吐き出された。淑女は軽やかにそれを躲（かわ）す。

現れたのは、左手を天に掲げた魔人。

「あら、見かけどおり丈夫にできてますこと。」

「光栄だな。」

魔人はにやりと笑った。

ダメメジが無い訳では決してない。しかしどれだけ魔法を当てようとそ

れを突つ切る様にしてゴルベータはシャントットと間合いを詰めてくる。

「甘い!」

「む!」

ビットから吐き出される透過レーザーをともに喰らい、シャントットは地に叩き付けられる。間を開けず襲い来る追撃を障壁と身のこなしでギリギリ躲す。接近戦になるとゴルベータが圧倒的に有利だ。飛び跳ねる様に淑女は間合いを開けた。

「ずいぶん肉弾的な戦い方なきさるのね。魔導士らしくもない。」

「そなた相手に、形振りなど構っておられまい。」

銀の髪が揺れ、その言葉と共に光球が容赦なく小さな身体に向かい飛んで行く。手加減こそが無礼千万といわんばかりに。

「良い心がけですこと!」

淑女も火球を放つ。二人の間で、大きく爆ぜて爆炎を上げた。

煙幕が引く。双方致命傷は受けていないが、無傷ともいえない。

双方の実力は均衡で、戦いが長引く事は明白で、それでも引かず二人は静かに睨み合った。

静寂が満ちる。

視線の勝負は、僅かにゴルベータが圧した。

シャントットは、ロッドを持つ手を下ろした。

「貴方、私の助手として働きなさいな。」

ゴルベータもまた、両の手を下ろした。